

行政と公益活動団体の共同事業について

両者の似て非なるものは その考え方にあると思います。

行政は Plan Do Check Action にあるのに対して 公益活動団体は See Think Plan Do という考え方である。

すなわち PDCA に対して STPD である。どちらにも PD は入っているが 公益活動団体は より現場に近いところで活動しているため See Think(相手研究)して Plan Do(自分たちの工夫)をせざるを得ないのに対し 行政は 現場からの情報に基づいて 計画を立てている。

本当は STPDCA のサイクルを回すのが 本来の姿ではないでしょうか?

See Think(相手研究)が なされていないまま いきなり Plan Do(自分たちの工夫)を行うため 考え方の違いが 生じるものと思います。

成功法則=能力×熱意×考え方と言いますが どちらも 日本人ですので 能力も熱意もありますが 考え方のベクトルが違くと わずかな差でも 先に行けば 声も形も見えなくなってしまう。行政と 公益活動団体の間で 起きている問題は これに尽きるのではないのでしょうか?

PDCA を検索すると 下記のように書かれており 行政は この考え方で すすめていると思われます。

Plan=計画

業務計画や達成したい目標を立てて計画を作成します。「誰が(Who)」「いつ(When)」「どこで(Where)」「何を(What)」「なぜ(Why)」「どのように(How)」「いくらで(How much)」行うのかという 5W2H を意識しながら、具体的な数値と合わせて目標を設定します。

Do=実行

計画に沿って業務を実行します。計画や目標達成のために実行できることを、時間や数値などで具体的に ToDo リストなどに落とし込み、順に実行していきます。

Check=評価

実行が計画に沿って行われたかどうか、目標を達成できているかどうかを評価します。また結果を見て、良かった点と悪かった点を客観的に数値などで分析し、どうしてそうなったかという要因を振り返ります。

Action=改善

評価を見ながら、良かった点は継続的に行い、悪かった部分はどのように改善するべきかを考えます。この計画を続けるか、修正するか、中止するかも考慮し、次のPlan段階へとつなげていきます。

See Think(相手研究)として 公益活動団体から次のような話がされた。

柏市は 厚労省の推進した 健康日本21で ウォーキングに取り組み その後補助金の廃止とともに 分裂し その人たちが それぞれクラブを作ったために 東葛地区は 日本の中でも ウォーキングクラブが 多い地区である。

柏市は 2年連続「転ばない都市」日本一に選ばれている。高齢者の健康寿命を支えてきた手賀沼ウォーキング大会が これからと言う時に 予算や参加者数を理由に 来年度から 我孫子市だけの大会になると聞いている。

柏市は 東大の飯島先生の「フレイルチェック」や 筑波大学の久野先生の「健康アンバサダー」など 日本の高齢者問題の課題解決をリードする活動をしている。これらにポイントを絞った 行政の取り組みが必要ではないか?

Plan Do(自分たちの工夫)として 公益活動団体から下記のような提案がされた。

柏市は 「フレイルチェック」を 実施しているが 全ての高齢者に対してある年齢に達したら 柏市民は「フレイルチェック」受けることとするなど 超高齢社会に対して ポイントを絞って実施してほしい。財政が縮小するから一律に減らしていくような PDCAのサイクルを回すべきではない。

今回の テーマについても 柏市から 提案された 計画には 数字表現がされていない。数字のない計画は いくらでも 作文できる。

他の地域の行政は 市役所の全部長が出席して 公益活動団体の提案の中にヒントがないか 取り入れられないか と取り組む姿勢と 財政に権限を持たない担当者が 対応する柏市では 姿勢が違う。

超高齢社会と言うことは 柏市の窓口を訪れる人も 年々高齢化しており 3つ言って3つ理解する人だけではなく 3つ言って1つか2つしか理解できない人も 訪れているはずである。認知症に対する オレンジリングを 地域包括などの講習を受けて 取得するように PR しているが まず 市の窓口職員に対して 教育を行うべきである。どの窓口担当者にとっても 必要なことであり オレンジリングをしていることで 市役所職員の一体感も出てくるし オレンジリングをしている市民とも 一体感が 醸成されると思う。

障害者問題の時 ノーマライゼーションという概念が 共有化されることにより大きく前進したように 高齢者問題は モディフィケーション(強度変換)という概念が 共有化される社会に なることにより大きく前進すると思われる。

今は 国を上げて 健康寿命をのばし 平均寿命との差を(男 9 年女 12 年)縮めようと取り組んでいる。人は 動物であり 植物ではない。歩かなければ歩けなくなる。柏市で 一人歩かせると 250 万円~300 万円医療費が 助かるということを聞いたことがある。 医療費が急激にかかるという 75 歳に団塊の世代になるのが 2025 年問題である。市の財政を医療費だけでなく 教育費に振り向けると言う考え方も必要になるのではないか。小学校・中学校は 義務教育として 柏市の財政負担となっている。超高齢化社会として これだけ平均寿命が長くなる(退職後 30~40 年)と 下山の義務教育として 1~2 年間医療費ではなく 教育費に 税金を使うと言うことをしても良いのではないか?と思われる。千葉県は 約 40 年位前から 千葉県知事を学長とした「生涯大学校」制度がある。また西の方では 元滋賀県知事の 国松氏が 「100 歳大学」という理念を発表し 卒業生が 出ていると言う。日本では老年学としては 桜美林大学・東大・立命館ぐらいしかないが 北欧を訪れた立命館の教授に これから社会に出る学生に ユニバーサルデザインの考え方を教育しないで社会に送り出すなんて 日本はどんな社会を作りたいのですか?と言われて 答えられなかったそうです。文化・言語・国籍や年齢・性別などの違い、障害の有無や能力差などを問わずに利用できることを目指した建築(設備)・製品・情報などの設計(デザイン)のことをわかる学生を社会に送り出さなければならない。財政面からも 社会や制度や製品も作り直すだけの 経済力が おちてきているに日本では ヒューマン・センタード・デザインという考え方の若者が送り出されてくる必要がある。

公益活動団体の市との共同事業について 1 回目として スポーツ関係として分類されてよばれたが STPDCA のサイクルで考えると 現役の人たちが分類することと 現役から退職した高齢者の分類することは 違うと言うことがわかりました。ちょうど 幼稚園の徒競走で 気持ちが進んでいるが 体が追いつかなくて こけてしまうお父さんがいるが 現役の人の分類は そのような考え方で 高齢者を分類していると言うのが わかりました。

飯島先生の 柏スタデイから 導かれた 「フレイルチェック」で 気づきを受けた人は **栄養** **運動** **社会参加**のフレイル予防に取り組む人が出てくるようになる。 高齢者の運動は 現役の方たちが考える運動ではなく「意識して歩くか意識して呼吸する」かが 運動なのです。

「意識して歩く」とは ペットボトルを寝かせたぐらいの高さまで 足先を上げて歩くことです。転ぶことなく早く歩けます。「意識して呼吸する」とは 舌を上顎にくっつけて呼吸することです。筋肉を使わないと呼吸できません。高齢者の方達に フレイルチェックで 体力的に小学校 4 年生以下になっていきますよと 気づかせることや 社会参加=あの人に会いたいと 会いに行く=歩くことによって 第2の心臓と言われる ふくらはぎが動き 血の巡りをよくします。血は 酸素と栄養と温度を 運んでいます。定年で 家に閉じこもっている男性よりも お料理の材料を購入するために 毎日買い物に歩いている女性の方が 血の巡りが良く長生きだと言うのも うなづけます。病気の背景には ストレスが潜んでいると ほとんどの人が知っています。

禁酒・禁煙して黙々と 筋トレやウォーキングに励む男性よりも 同じ趣味の人に会うために出かけて 食事をして談笑し ストレスを溜めない女性の方がフレイル度が 少ないのもうなづけます。人に会うために歩くことが 運動なのです。プレフレイルではなく フレイルの人の運動とは 現役の方達が考える運動の分類ではなく「意識して歩くか意識して呼吸すること」が運動なのです。

以上のことから 行政と公益活動団体の共同事業について 意見をきく今回の分類も 現役の方達が考える分類で 招集日を 分けていらっしゃるが 公益活動団体に所属している人たちに 会うことを 楽しみに参加すること 自体が 「意識して歩くか意識して呼吸する」という 運動なのです。したがって 分類そのものは あまり重要ではありませんが 公益活動団体側からすると 同じような分野の団体の 活動などが知れて よかったです。感謝いたします。

フレイルチェックで 自分のフレイルに気づいた人は 柏市の公益活動団体の活動のどれかに参加することが 健康寿命を延伸させることにつながり「栄養・運動・社会参加」の良循環につながり 市の財政負担軽減にも繋がると思っています。結論としては フレイルチェックを 市の活動方針の中心課題に据えて 取り組んではどうかという 意見に集約されたと思います。